

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01670

研究課題名(和文) 読書行為の多様性に対応する発達モデルに基づいた包括的学習支援アプローチの開発

研究課題名(英文) Development of a Comprehensive Learning Support Approach Based on a Developmental Model Corresponding to the Diversity of Reading Behaviors

研究代表者

守田 庸一 (MORITA, Yoichi)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：60325305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、【個別かつ多様・多層な読解力発達モデル】を前提とした包括的学習支援アプローチの開発である。従来の発達モデルは、各学齢期の中心傾向をとらえたものであった。しかし実際の教室における読解活動は、多様で多層な読書反応が社会的協働の中で関わり合う動的な営みである。そうした個別かつ多様・多層な読解の様相をもった児童生徒を適切に支援する国語科読解指導としてのマルチレベル支援アプローチの開発は喫緊の課題である。この課題に応じて、本研究では、理論的考察から読書行為モデルを導出するとともに実態調査の結果を質的に分析して、読書行為の多様性に対応した包括的学習支援を示唆する国語科授業を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

児童生徒の実態に基づき読むことを個別かつ多様・多層なものとして捉えた本研究は、【中心・求心的な傾向としての読解力発達モデル】を乗り越えて、教育現場の現在に応じた【個別かつ多様・多層な読解力発達モデル】を具体的かつ実証的に提案した先進的な研究である。現在を生きる児童生徒の読解力を育成する国語科の包括的学習支援アプローチは明らかにされてこなかった。国内外の研究や実践をふまえ、これを学際的に開発した点において本研究の成果には学術的意義がある。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められる今日の教育に対しても、本研究はそうした学びのあり方の具体化に資するものであり社会的に意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a comprehensive learning support approach based on the premise of "individual, diverse, and multilayered model of reading comprehension development". Conventional developmental models have captured the central trends of each school age. However, reading comprehension activities in the classroom are dynamic activities in which diverse and multi-layered reading responses are interacted in social collaboration. There is an urgent need to develop a multi-level support approach for Japanese language reading comprehension instruction that appropriately supports students with such individual, diverse, and multi-layered reading comprehension. In response to this issue, this study derives a model of reading behavior from theoretical considerations, qualitatively analyzes the results of fact-finding surveys, and proposes a Japanese language class that suggests comprehensive learning support that responds to the diversity of reading behavior.

研究分野：国語教育学

キーワード：読書行為 多様性 読解力 発達モデル 包括的学習支援アプローチ 国語科

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの国語科教育研究では、「読む力」の発達について、個々のパフォーマンスを集約して中心傾向を析出し構造化した【中心・求心的な傾向としての読解力発達モデル】が追究されてきた。しかし、今日の学校教育現場が抱える実態、また、21世紀型学力と呼ばれる新学力観への対応という点で、その有効性については限界が指摘されてもいた。現実の教室は、さまざまなニーズを抱えた子どもたちが、それぞれの多様性に基づいて在籍している。その多様性こそが、教室において仲間の声に出会い、対話し、交流することの意味を根拠づけるものである。新学力観が求めた汎用性の高いリテラシーとは、そうした現実の多様性をふまえながら、社会的協働の中で柔軟かつ創造的な問題解決を遂行する力だと言えよう。「読む力」の発達モデルもまた、そうした教室の多様性を記述するものへとバージョンアップされるべきである。

教室に実在する子どもたちは、それぞれが愛好する「読みのストラテジー」に基づき各自の読書反応を形成して読書生活を楽しみ、概括的なフレームには回収し得ないレベルで、個性的な「読む力」の様相を抱えている可能性がある。そうした個性的なストラテジーを駆使する仲間による社会的協働によって、教室におけるテキストの読みは成立していると考えられる。たとえば教室における子どもたちを一つの集合として見るのではなく、個別性や多様性・多層性を有する集団としてとらえることで、全ての子どもたちを支援するための理論的・実践的な研究が進んでいる生徒指導や教育相談の分野では、マルチレベルアプローチ (MLA) と呼ばれる生徒指導プログラムが存在する。しかしながら日本における MLA 研究は、主に個人的・社会的発達やキャリア的発達の領域に重点が置かれており、教科教育領域での取り組みがなされることはほとんどなかった。

研究開始当初においては、以上のような考察から、【中心・求心的な傾向としての読解力発達モデル】から【個別のかつ多様・多層な読解力発達モデル】の記述へと、発達研究が発展する必要性が見いだされる状況にあった。

なお、本研究課題は、これまでに研究代表者・研究分担者によって取り組まれてきた以下の発達研究に立脚するものである。

国語科教育改善のための国語能力の発達に関する総合・実証的研究 (基盤研究(A)、研究代表者：大槻和夫、1994～1996年度)

国語科教育改善のための国語能力の発達に関する実証的・実践的研究 (基盤研究(B)、研究代表者：大槻和夫(1997・1998)・吉田裕久(1999)、1997～1999年度)

国語科教育改善のためのコミュニケーションの発達に関する実証的・実践的研究 (基盤研究(B)、研究代表者：位藤紀美子、2001～2003年度)

国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実験的・実践的研究 (基盤研究(B)、研究代表者：位藤紀美子、2004～2006年度)

国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実践的・連携的研究 (基盤研究(B)、研究代表者：位藤紀美子、2007～2009年度)

国語科教育改善のための言語コミュニケーションの発達に関する連携的・提案的研究 (基盤研究(B)、研究代表者：植山俊宏、2010～2012年度)

国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する連携的・実案的研究 (基盤研究(B)、研究代表者：植山俊宏、2013～2016年度)

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの国語科教育研究で追究されてきた【中心・求心的な傾向としての読解力発達モデル】に代わる【個別のかつ多様・多層な読解力発達モデル】を前提とした、包括的学習支援アプローチを開発することにある。

従来の読解力発達モデルは、それぞれの学齢期の中心傾向を捉えたものであった。しかし実際の教室における読解活動は、児童生徒による多様で多層な読書反応が彼らの社会的協働の中で関わり合い、そしてせめぎ合いながらせり上がってゆく動的な営みとしてとらえられる。本研究課題は、そうした個別的多様・多層な読解の様相をもった子どもたちを適切に支援するための、国語科読解指導としての包括的支援アプローチの端緒を拓くものである。

## 3. 研究の方法

本研究においては、以下のように理論的な考察(他領域における先行研究等をふまえた抽象的考察)と実証的な分析(調査に基づく具体的な読みの実態把握とその分析)によって、両者を相互に補完させながら研究を進め、その成果を国語科授業実践に反映させた。なお、新型コロナウイルス感染症対策とその影響等のため、大規模な実態調査や学会における中間報告を断念するといった研究計画・研究方法の変更が生じた。また、2019年度から2022年度までであった研究期間を1年間延長し、2023年度までとした。

研究の当初においては、まず、マルチレベルアプローチ (MLA) における生徒指導プログラム

の多様・多層な評価・支援システムを理論的に学び、国語科学習における読解パフォーマンスの多様性を合理的に捉えるための基礎理論を構築することを目指した。その過程を通じて、文学テキストの読みのパフォーマンスを包括的に捉えるための評価のフレームとしての読書行為モデルを理論的に導出した。本研究で導出したモデルとは、文学テキストを読む児童生徒の読書行為を、読書行為において注目している【文学テキストを構成する構成要素（認知的道具）】（何を手掛かりに）と、そのテキストに対する【読書行為のモード】（どのような態度で読書反応しようとしているのか）の関係で把握しようとするものである。またこれらに、【社会的協働のモード】（どのように社会的な分かち合いを行おうとしているのか）というパラメーターが加えられている。

上記の読書行為モデルの導出をふまえて、読書行為の多様性を把握するための実態調査を実施した。この調査では、江國香織「子供たちの晩餐」（『暖かなお皿』（理論社、1993年）所収）を調査テキストとして用いて、小学校3年生～6年生、中学校3年生、大学生、社会人の合計189名を対象に、調査テキストを読んだ感想の記述を求めた。なお、調査対象の年齢によっては読み聞かせによって調査を実施するなど、調査方法に詳細な統制はかけなかった。また、この調査は量的な分析を求めるものではない。分析に際しては、収集した感想を一文ごとに切片化し、合計1214の切片とした。これらの切片について、探索的なラベリングを繰り返して実施し、前述の読書行為モデルに合わせて【物語の構成要素】（2レベル）・【読書行為のモード】（2レベル）・【社会的協働のモード】（2観点）からの分析を行った。この分析は、限定的はあるが、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の方法によるものでもあった。

以上を経て、これらの読書行為モデルの導出と調査結果に合致する包括的支援アプローチを示唆する実践例として、小学校6年生を対象とした「つぶやき地図」を取り入れた国語科授業を提案し、その分析と考察を通じて実践の有効性を検討した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は以下の3点にまとめられる。

(1)【文学テキストを構成する構成要素（認知的道具）】【読書行為のモード】【社会的協働のモード】の3点からなる読書行為モデルを導出した。

【文学テキストを構成する構成要素（認知的道具）】とは、たとえば、題名・冒頭と結末・人物やキーアイテム・プロット・語りという文学テキストを読むときに手掛かりとなる分析の観点のことである。私たちの社会には、繰り返されてきた過去の読書行為が、慣習的な文化資産として蓄積されている。読者が物語テキストに触れるとき、何らかの形で、そうした過去の蓄積を認知的道具として活用することになる。教室で繰り返し用いられる読み方として潜在的に、あるときには顕在的に共有される慣習的知識である。

【読書行為のモード】とは、読者が文学テキストと関わる時の関わり方のスタイルである。たとえば、叙述された【物語言説】（表現）に促されて、【物語内容】の詳細な探究に向かうことがある。これを【テキストとの対話】モードと呼ぶ。それに対して【物語言説】の特徴を評価することを通して、その文学テキストを語りなしている主体（語り手）への関心を持つことがある。なぜそんなふうに語ったのだろう、と分析を進めるのである。こうしたモードを【語り手との対話】モードと呼ぶ。

【社会的協働のモード】（どのように社会的な分かち合いを行おうとしているのか）というパラメーターは、たとえば次のような三つのモードが考えられる。互いの主張をできるだけ批判的に否定的に取り扱う態度によって特徴づけられた【論争的会話】。またその逆に、互いの主張を否定せず、徹底的に肯定することによって、アイデアの集積を狙う会話モードである【累積的会話】。こうした相反するモードの弁証法的様態である【探索的会話】は、社会的協働の目的に応じて、否定と肯定をバランスさせる会話モードである。

本研究では、「1. 研究開始当初の背景」に挙げたこれまでの研究課題～の研究成果（位藤紀美子監修『言語コミュニケーション能力を育てる - 発達調査をふまえた国語教育実践の開発 -』（世界思想社、2014年）等にて公表）を統合しながら、本研究課題における理論的考察の成果として、上述のモデルを提案した。

(2)読書行為モデルの導出をふまえて、読書行為の多様性を把握するための実態調査を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の方法も取り入れて分析した。

新型コロナウイルス感染症対策とその影響等のため、本研究では対面あるいはオンライン・オンデマンドによる大規模な実態調査ではなく、質的調査の研究方法によりながら、小中学生だけでなく大学生・社会人も対象にした調査を行った。

この調査の結果からは、全体的には「登場人物」「読み手」についての反応が多いことや、たとえば小学校3年生ではテキストに登場する子どもたちの行動を不思議に思う傾向があること、表現を表意通りに読むこと、プロットではなく場面全体で反応している可能性があることが示唆された。また小学校6年生では、内的状態の推論であっても分析的な傾向がある一方で、表意通りに推論しようとする傾向も見られた。あるいは、授業場面では表出されにくい反応（間テクス的な読みやアイテムの価値への言及）が存在することも指摘された。

本調査においては、こうした傾向を把握するのにとどまらず、収集したデータ（感想）の切片

を分析することで読書行為の多様性をとらえた。たとえば「よくそんなことできるな、なんで肉とかサラダとかパンをバケツに投げ捨てたんだろう、なんでこっそりカップラーメンとかを食べたんだろう。」という小学校3年生の記述に対して、【物語の構成要素】のラベル＝登場人物 - 登場人物の内的状態、【読書行為のモード】のラベル＝評価 - 登場人物の言動への批判、【社会的協働のモード】のラベル＝自己に向かう意識：自分の規範意識に照らす / 構成：列挙 / 文体：つぶやき、といったラベリングを行った。この児童の場合、登場人物の子どもたちが食べ物を投げ捨てる行為に対して反応を示している。この反応の中心は、物語構成要素の登場人物の中でも、その行為の理由（動機）を問う点で、登場人物の内的状態にある。読書行為としては、「よくそんなことできるな」とあることから、評価の中でも登場人物の言動への批判を行うものである。また社会的協働の仕方としては、テキストから自己への照射としては自分の規範意識に照らす行為をしながら、構成としては列挙、文体としてはつぶやきの文体によって表出しているのとらえられる。つぶやきの形を取りながら読みを表出する姿はSNS等にも見られる姿であり、私たちの社会的協働のモードの一つとして見ることができるだろう。

こうしたラベリングとそれぞれに対する考察の結果から、中心・求心的な傾向にとどまらない多様・多層な読解反応をとらえることができた。テキストのジャンルによって反応が表出されにくい構成要素があると考えられることから、本調査の結果をふまえた今後の研究によって、子どもたちの読解パフォーマンスを捉えるためのより精緻な枠組みが得られるだろう。

(3)包括的支援アプローチを示唆する国語科授業を提案し、その有効性を検討した。提案したのは、多様な児童の読みの反応を出発点に、主体的追究と協働的交流によって展開する文学の授業である。小学校6年生を対象とした全10時間の単元であり、2023年9月13日～10月5日に福岡県の公立小学校で実施された。

個別的かつ多様・多層な児童の反応を活かす授業を構想するためには、次の視点が必要である。

- 1 個別的で多様な児童生徒の反応をどのような形で引き出すか
- 2 個別的で多様な児童生徒の反応をどのように学習に生かすか
- 3 児童生徒の反応それぞれをどのような社会的協働の場を設けて交流させるか
- 4 児童生徒固有の読解力の向上をどのように保障し、看取るか

上記の4つの視点に応じて、本実践では次のように授業をデザインした。

- 1 「つぶやき地図」を書く。
- 2 「つぶやき地図」をもとに児童それぞれが自分の関心に基づいて追求課題を決める。
- 3 教室に相談コーナーを作り、必要を感じた児童がそこに集まり対話をする場を設定する。
- 4 課題を追求するのに必要な読解方略を教師が積極的に教え、その活用を促し活用できたかどうかを制作物や振り返りの記述によって看取る。

この授業では、宮沢賢治「やまなし」/畑山博「イーハトーヴの夢」(光村図書『国語 六 創造』(2019年検定済教科書)所収)や宮沢賢治「注文の多い料理店」前書きを共通テキストとして、教室には宮沢賢治作品(注文の多い料理店・セロ弾きのゴーシュ・オツベルと象・度十公園林・よだかの星・雪わたり・グスコブドリの伝記・どんぐりと山猫・氷河鼠の毛皮・双子の星・獅子踊りのはじまり・月夜のでんしんばしら・土神と狐・狼森と笹森、盗森・山男の四月・よく利く薬とえらい薬・猫の事務所・カイロ団長・風の又三郎・水仙月の四日・銀河鉄道の夜)のほか宮沢賢治について記された様々な図書が用意された。音読を聞いた後に再度自分で黙読したときに心に浮かんだことを丁寧に書き出す「つぶやき地図」をもとに追求課題が定められ、それについて調べたり考えたりする学習が行われた。課題の追求においては各々の課題に取り組み、そこでは個々の学びと対話の往還が図られる。また中間交流会も設けられて、同じような課題を持った児童がグループとなって、お互いの内容を紹介したり感想を伝え合ったりする。単元の最後には「やまなし大展覧会」が催され、各自がまとめた成果の交流と情報の交換が促され、新たな学びが得られるようになっている。

本授業においては多様な読みの方法の理解が求められており、「つぶやき地図」には疑問・感想・解釈等の多様な読みが書き出されることがねらわれている。「つぶやき地図」は、初読の感想を書く活動と比べて断片的思考(浮かんですぐ消える所感)を記録できる、微細な部分に立ち止まりやすい、局所的反応が書き込める、こだわりたい部分に関する思考の流れが記せるといった有効性が見いだされる。こうした記述を通して得られた各自の追求課題も多様である。

本研究では、「つぶやき地図」の記述や学習活動の録画等の分析、振り返りや事後に実施したアンケートにおける固有の学びの把握等によって、授業に至るまでに導出された読書行為モデルと照合しながら授業の有効性の検証が行われた。この実践の意義を端的に述べるならば、愛好する読みの方略(追求課題)が異なる児童が、それぞれの多様性を生かし合いながら(社会的協働活動によって)それぞれの読みを確立させていった点にある。本単元は、児童の読みの多様性から授業を立ち上げて協働的な活動を仕組んだ学習展開、すなわち読みの多様性を引き出し、そこから児童が自分で追求課題を立てて学習していく展開になっている。そしてそのプロセスに、

協働的な活動を行える空間と時間が用意されている。また、この実践を通じて、読書行為モデルの詳細化も図られた。自由な空間と時間の中で、ゴールを念頭に置いて活動する中で生まれる対話活動が具体的に示されたことで、社会的協働のスタイルの詳細を描きだせたと言えよう。さらに、学習支援のありかたの具体化として、すべての子どもを対象とした一次的指導（自分でできる力を育てる：教師は「いい読み大賞」の提示、資料の補充及び適切な資料へ導く個別支援を行い、個人学習を支える）、すべての子どもを対象とした二次的指導（友だち同士で支え合う力を育てる：教師は教室に相談コーナーを設置し、課題が共通する児童や困っている児童に情報を提供できる児童を引き合わせ対話をコーディネートする）、一部の子どもを対象とした三次的指導（教師が中心となって支える：無気力で指示を待っている児童には、手を引き具体的に支援する）も示された（参考：栗原慎二(2017)『マルチレベルアプローチ だれもが行きたくなる学校づくり 日本版包括的生徒指導の理論と実践』ほんの杜出版）。個人学習を主軸にして、個別の児童のニーズに応じた、また意図的な働きかけが自由にできる学習支援が行われたこの実践は、本研究の成果を具体的に示したものであると言えよう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計46件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 35件）

1. 著者名 稲田八穂	4. 巻 -
2. 論文標題 通常学級における支援の必要な児童の読みの指導：絵本を活用して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新しい時代に対応した持続可能な保育・初等教育の在り方	6. 最初と最後の頁 362-378
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 63
2. 論文標題 読む文化・読むコミュニティを築く基盤としての「共通テキストを読む」授業と自立した読者の育成：ケイト・ロバーツ『小説アプローチ』を手がかりとして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語教育研究	6. 最初と最後の頁 14-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 71
2. 論文標題 「見る」を含む学習の系統性(4)：源氏物語「若紫」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 137-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 若木常佳・中村昇大朗・浦未希・石倉直志	4. 巻 71
2. 論文標題 学習者中心の教育の実現に向けて：学習形態・支援ツール・学習コミュニティを手がかりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 297-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河野智文	4. 巻 71
2. 論文標題 小・中学校国語教科書における「随筆を書くこと」教材の検討：令和2・3年度改訂を観点として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲田八穂	4. 巻 2
2. 論文標題 絵本を活用した構音障害学生に対する指導：絵本の読みがたりを通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 筑紫女学園大学初等教育保育研究	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井悠加・山田洋平	4. 巻 14
2. 論文標題 小学校国語科における物語創作教材の分析：人物の描き方と役割取得能力の発達に関連に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根国語国文	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中井悠加	4. 巻 62
2. 論文標題 小学生の物語創作能力の発達に関する文献レビュー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 島根県立大学松江キャンパス研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 62
2. 論文標題 文学の対話的論証 (Dialogic Literary Argumentation) 」と学習評価：文学の授業における生徒への フィードバックを中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語教育研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山元悦子	4. 巻 70
2. 論文標題 幼児の物語理解プロセスの究明：5・6歳児を対象とした絵本の読み合い時の反応に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 61-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本浩治	4. 巻 42(4)
2. 論文標題 教科教育学研究と教師教育実践、そして教師教育研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中井悠加・古賀洋一・米沢崇	4. 巻 2
2. 論文標題 教員免許状更新講習の構想・実践・省察を促す講師用ルーブリックの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報	6. 最初と最後の頁 35-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 原田大樹・山北佳月・野中正知	4. 巻 9
2. 論文標題 小学校国語科における共通語・方言指導：ICT機器を用いた指導実践について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州国語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 121-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 幾田伸司	4. 巻 22
2. 論文標題 国語教科書の機能から見た編修様式の変遷：デジタル教科書の編修様式に向けての展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語教育史研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守田庸一・林朝子	4. 巻 4
2. 論文標題 教職大学院における国語科関連科目の教材について：幼児期から小学校低学年の表現とその指導	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三重大学教職大学院論集	6. 最初と最後の頁 98-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田大樹・毛利泰剛	4. 巻 24
2. 論文標題 教員養成課程におけるコミュニケーション能力の育成	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編	6. 最初と最後の頁 51-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 竜田徹・若木常佳・坂東智子・濱大輔	4. 巻 7
2. 論文標題 生きた言語教育の学びの場：『DAT Plus』「23の学習ライン」から日本の国語教育の示唆	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 684-699
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中井悠加・Sue Dymoke	4. 巻 Vol.61 No.2
2. 論文標題 国際化時代における詩創作教育学に関する日英共同研究：詩創作ワークショップ実践の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 読書科学	6. 最初と最後の頁 97-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 田中智生	4. 巻 第33号
2. 論文標題 カリキュラム・マネジメントに資する教材研究 - 小学校・説明的文章のばあい -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岡山大学国語研究	6. 最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植山俊宏	4. 巻 No.575
2. 論文標題 カリキュラム・マネジメントを内的発想から構築する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植山俊宏	4. 巻 第87集
2. 論文標題 国語科教材研究の再構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山元悦子・廣口知世	4. 巻 第69号 第1分冊
2. 論文標題 言語コミュニケーション能力を育て、主体的・協働的学びのカリキュラムをデザインするトピック学習の 試み - 小学6年生の国語学習を核として -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 39-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子・住江めぐみ・田中章憲・吉田充寿・作花麗美	4. 巻 第69巻 第1部
2. 論文標題 ナラティブ・アプローチによる小中一貫国語科カリキュラム開発研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 第69巻 第1部
2. 論文標題 「見る」を含む学習の系統性(2) 写真や絵画を見るときには	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 第66巻 5・6月号
2. 論文標題 言語化能力と連動する「見る」力の系統的な育成 君は『最後の晚餐』を知っているか(中二)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 解釈	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 38巻 5号
2. 論文標題 「文学国語」の授業をどう考えるか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 86-95
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 幾田伸司・宮本浩治・金子萌・守田庸一	4. 巻 第33号
2. 論文標題 テキストの二重構造に着目した説明的文章教材分析の観点	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 語文と教育	6. 最初と最後の頁 30-43
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本浩治	4. 巻 第42巻 第4号
2. 論文標題 教科教育研究と教師教育実践,そして教師教育研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田祐二	4. 巻 58号
2. 論文標題 国語科におけるICTとしてのプログラミング活用の効果 - 教員養成課程における実践の分析を通して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 語学文学	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 富安慎吾	4. 巻 27
2. 論文標題 教育実習生の事後的省察を支援する方法についての考察 事後指導における協同的な活動の批判的検討を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語教育論叢	6. 最初と最後の頁 107-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若木常住	4. 巻 25
2. 論文標題 研究ノート リフレクションへの志向性の形成を促す学習内容に対する提案: 教職大学院での実践の具体に基づいて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 55-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20677/csssej.25.0_55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 守田 庸一	4. 巻 13
2. 論文標題 第1章 論理を創る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20555/booklet.13.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 守田 庸一	4. 巻 94
2. 論文標題 説明的文章指導のこれまでとこれから	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 11-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20555/kokugoka.94.0_11	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 65
2. 論文標題 読むことの学習評価につながる理解方略指導の枠組み:「BHHフレームワーク」で「いかに読むか」を共有する	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国語教育研究	6. 最初と最後の頁 58-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 難波優太郎・宮本浩治	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 学習の足場としての「めあて」に関する研究:「言語活動の充実」を通じた資質能力の育成	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中井悠加	4. 巻 63
2. 論文標題 [Remembrance] The thirty-minute doors: Sue Dymoke's research on poetry writing pedagogy and its impact on Japan(in English)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 鳥根県立大学松江キャンパス研究紀要	6. 最初と最後の頁 115-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植山俊宏・深田菜々子・杉山瑞葵	4. 巻 6
2. 論文標題 特別支援学校における協同的体制による俳句創作指導に関する研究(1) : 授業研究、学習者研究、教員研修研究の複合的方法による実践研究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 幾田 伸司、北田 友香、山本 千奈、谷脇 諒祐	4. 巻 22
2. 論文標題 物語教材における読みのスタンスの評価基準 : 見物人的スタンスのルーブリック作成の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鳴門教育大学授業実践研究 : 授業改善をめざして	6. 最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24727/0002000272	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河野智文	4. 巻 73(1)
2. 論文標題 国語教科書における古典を学ぶ意義に関する記述の検討 : 高等学校「言語文化」教科書を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子	4. 巻 73
2. 論文標題 「見る」を含む学習の系統性(6) : 源氏物語「御法-紫の上の死」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂東智子・貞安菜央	4. 巻 56
2. 論文標題 言語行為主体性を発揮して学ぶための指導法に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田奈未・宮本浩治・池田匡史・榎野滋子	4. 巻 14
2. 論文標題 「目指す生徒像」を意識した組織的な授業改善:「自ら学び、思いや考えを伝え合う力」を育む国語科指導を軸として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 265-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田匡史・石橋一昂・詫間千晴・服部裕一郎・岡崎正和・宮本浩治・山田 秀和・川崎弘作	4. 巻 42
2. 論文標題 教職大学院教科教育領域における教育実践力の向上と実践研究の推進の架橋:学部新卒院生によるリフレクションを促す場の構想	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本教育大学協会年報	6. 最初と最後の頁 141-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若木常佳	4. 巻 73(4)
2. 論文標題 教職大学院の「学校における実習」に対する教師教育者の関わり	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 289-300
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 砂川誠司	4. 巻 82
2. 論文標題 国語科メディア教育における対話的活動の検討：写真についての話し合いをどう捉えるか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国語国文学報	6. 最初と最後の頁 115-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 幾田伸司	4. 巻 32
2. 論文標題 平成期中学校国語教科書における読み物教材の採録状況	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語教育思想研究	6. 最初と最後の頁 305-314
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 宮本浩治
2. 発表標題 国語科における「想像的・論理的思考力」育成のための言語パフォーマンス評価の開発
3. 学会等名 日本教育実践学会第24回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本浩治
2. 発表標題 国語科における本質的な学びを支える「指導と評価の一体化」のための実践的議論：「学習の足場づくり」としての「めあて」づくりに着目して
3. 学会等名 日本教育実践学会第25回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 若木常住・藤原顕・矢野博之・宮本浩治
2. 発表標題 自己探究に向かう教師のリフレクション：対話的自己を観点としたカリキュラム開発の試み
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂東智子
2. 発表標題 「見る」を含む学習の系統性(10)：源氏物語「御法・紫の上の遺言」
3. 学会等名 第142回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲田八穂
2. 発表標題 一人一人の多様な読みを共感する学び合いの授業作り：通常学級の支援の必要な子どもへの手立て
3. 学会等名 第138回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 文学教育における「対話的文学討議(Dialogic Literary Argumentation)」と学習評価：生徒へのフィードバックを中心に
3. 学会等名 第139回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 幾田伸司
2. 発表標題 小学校国語教科書における科学的説明文教材の史的考察
3. 学会等名 第72回中国四国教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若木常佳
2. 発表標題 自己探究に培う学習の実践に向けて
3. 学会等名 第140回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 「共通テキストを読む」と「一人で選んで読む」とのバランスを探る「読むこと」の教育：Kate Roberts(2018)A Novel Approachを手がかりとして
3. 学会等名 第141回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中井悠加・米沢崇
2. 発表標題 教員のチーム・チームワークに関する概念の整理と再定義
3. 学会等名 日本教師教育学会第32回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原田大介・稲田八穂
2. 発表標題 インクルーシブの観点に立った国語の授業
3. 学会等名 日本国語教育学会 第44回 西日本集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuka Nakai・Masafumi Ikeda
2. 発表標題 An exploratory consideration of approaches to assessing children's poetry: How do we view poetry written by secondary school students?
3. 学会等名 21st European Conference on Literacy (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米沢崇・中井悠加
2. 発表標題 職場における協働経験が教師個人のチームワーク能力に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教師教育学会第29回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本浩治
2. 発表標題 論理的表現力・思考力を育むためのカリキュラム開発
3. 学会等名 日本教育実践学会 第22回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本浩治
2. 発表標題 教科教育研究と教科教育実践と教科教育研究
3. 学会等名 日本教科教育学会 第45回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 読むことの学習指導における「選択する学び」と評価 Gordon(2018)No More Fake Readingを手がかりとして
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会 仙台大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂東智子
2. 発表標題 「見る」を含む学習の系統性(4) 竹取物語「天の羽衣」
3. 学会等名 第136回全国大学国語教育学会 茨城大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂東智子
2. 発表標題 「見る」を含む学習の系統性(5) 源氏物語「若紫」
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会 仙台大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富安慎吾
2. 発表標題 国語科の教科内容を問い直すための考察 「書くこと」における「ジャンル」についての学習に焦点をあてて
3. 学会等名 第136回全国大学国語教育学会 茨城大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守田庸一・住田勝・山元隆春・山元悦子・富安慎吾
2. 発表標題 読書行為の多様性に対応する発達モデルに基づいた包括的学習支援アプローチの提案：文学の読みにおける仮説導出のためのパイロット調査をふまえて
3. 学会等名 第145回全国大学国語教育学会 信州大会 ラウンドテーブル
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山元隆春・守田庸一・住田勝
2. 発表標題 文章・対話・学び：オーセンティックな読む行為が成立する条件
3. 学会等名 広島大学大学院人間社会科学研究科「教育ビジョン研究センター(EVRI)」定例オンラインセミナー講演会No.136
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 富安慎吾・守田庸一・羽鳥彩加・青山由紀
2. 発表標題 授業場面における国語科教科内容の生成
3. 学会等名 第144回全国大学国語教育学会 島根大会 シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山元隆春・貴志倫子
2. 発表標題 教科教育学研究のメソドロジー：私たちは何のために何をどのように研究しているか
3. 学会等名 教科教育学コンソーシアム 第4回シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 中井悠加
2. 発表標題 Development and Validation of Reading Tasks in Secondary Japanese Language Education: Providing Appropriate Support to Students with Reading Difficulties
3. 学会等名 Developmental Dyslexia Symposium(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中井悠加
2. 発表標題 国語科における個別最適な学び：MLA(マルチレベルアプローチ)との関わりから
3. 学会等名 第22回京都国語教育アセンブリー(招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 読むことの学習評価につながる理解方略指導論の検討(2)：Beers & Probst(2020)Forged by Readingを中心に
3. 学会等名 第145回全国大学国語教育学会 信州大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 坂東智子
2. 発表標題 「見る」を含む学習の系統性(12)：源氏物語「幻 父と子」
3. 学会等名 第145回全国大学国語教育学会 信州大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計21件

1. 著者名 幾田伸司（編著）ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 76
3. 書名 対話的な学びで一人一人を育てる中学校国語授業 1 「少年の日の思い出」の授業	

1. 著者名 山元隆春（編著）・植山俊宏・中井悠加ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 205
3. 書名 新・教職課程演習 第10巻 初等国語科教育	

1. 著者名 宮本浩治・中井悠加ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版社	5. 総ページ数 239
3. 書名 新・教職課程演習 第16巻 中等国語科教育	



1. 著者名 中井悠加ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 153
3. 書名 新・教職課程演習 第22巻 教育実習・教職実践演習	

1. 著者名 幾田伸司（編著）ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 379
3. 書名 板書で見る全単元の授業のすべて 国語 中学校2年	

1. 著者名 山元隆春・難波博孝・山元悦子・千々岩弘一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 346
3. 書名 あたらしい国語科教育学の基礎	

1. 著者名 中井悠加ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 165
3. 書名 「子どもの論理」で創る国語の授業：書くこと	

1. 著者名 ネイサン メイナード・ブラッド ワインスタイン・高見佐知・中井悠加・吉田新一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 268
3. 書名 生徒指導をハックする：育ちあうコミュニティをつくる「関係修復のアプローチ」	

1. 著者名 ジェラルド ドーソン・山元隆春・中井悠加・吉田新一郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 190
3. 書名 読む文化をハックする：読むことを嫌いにする国語の授業に意味があるのか？	

1. 著者名 スター サックシュタイン・中井悠加・山本佐江・吉田新一郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 250
3. 書名 成績だけが評価じゃない：感情と社会性を育む（SEL）ための評価	

1. 著者名 辻村敬三	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 265
3. 書名 国語科内容論×国語科指導法 平成29年版学習指導要領に基づく国語科学習指導の在り方	

1. 著者名 稲田八穂ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 223
3. 書名 よくわかる インクルーシブ教育	

1. 著者名 山元隆春ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 170
3. 書名 詩とイメージの教育	

1. 著者名 住田勝ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 207
3. 書名 あまんきみこハンドブック	

1. 著者名 植山俊宏・稲田八穂・幾田伸司・河野智文・砂川誠司・住田勝・長岡由記・原田大介・村井万里子・山元悦子・山元隆春ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 201
3. 書名 新たな時代の学びを創る 小学校国語科教育研究	

1. 著者名 植山俊宏・守田庸一・上田祐二・上山伸幸・寺田守・富安慎吾・中井悠加・坂東智子・宮本浩治・山元隆春・若木常佳ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 266
3. 書名 新たな時代の学びを創る 中学校・高等学校国語科教育研究	

1. 著者名 廣口知世・山元悦子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 240
3. 書名 トピック学習で話し合う力を育てる：子どもたちとつくり上げた6年間の軌跡	

1. 著者名 幸坂健太郎・宮本浩治	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 136
3. 書名 小学校国語：NGから学び直す発問	

1. 著者名 中井悠加・田中理紗・飯村寧史・吉田新一郎（訳）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新評論	5. 総ページ数 320
3. 書名 学びの中心はやっぱり生徒だ！：「個別化された学び」と「思考の習慣」	

1. 著者名 植山俊宏ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 184
3. 書名 「深い学び」を生み出す国語授業の発問・助言・学習課題：指導言の切れ味が学びの質を決める（国語授業の改革22）	

1. 著者名 富安慎吾ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 今井出版	5. 総ページ数 464
3. 書名 自覚的な表現者を育てる国語科授業の探求	

〔産業財産権〕

〔その他〕

教科指導とMLA：自己表現の持つ意味 <a href="https://aises.info/2019/07/30/kyoikushinbun-rensai6/">https://aises.info/2019/07/30/kyoikushinbun-rensai6/</a>
---

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	幾田 伸司  (IKUTA Shinji)  (00320010)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授    (16102)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	寺田 守 (TERADA Mamoru)  (00381020)	京都教育大学・教育学部・准教授  (14302)	
研究分担者	中西 淳 (NAKANISHI Makoto)  (10263881)	愛媛大学・教育学部・教授  (16301)	
研究分担者	山元 悦子 (YAMAMOTO Etsuko)  (20220452)	福岡教育大学・教育学部・教授  (17101)	
研究分担者	稲田 八穂 (INADA Yaho)  (20612518)	筑紫女学園大学・人間科学部・教授  (37117)	
研究分担者	砂川 誠司 (SUNAGAWA Seiji)  (20647052)	愛知教育大学・教育学部・講師  (13902)	
研究分担者	宮本 浩治 (MIYAMOTO Koji)  (30583207)	岡山大学・教育学域・准教授  (15301)	
研究分担者	住田 勝 (SUMIDA Masaru)  (40278594)	大阪教育大学・教育学部・教授  (14403)	
研究分担者	富安 慎吾 (TOMIYASU Shingo)  (40534300)	島根大学・学術研究院教育学系・准教授  (15201)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中井 悠加 (NAKAI Yuka) (40710736)	島根県立大学・人間文化学部・准教授  (25201)	
研究分担者	上山 伸幸 (Ueyama Nobuyuki) (40780325)	創価大学・教育学部・准教授  (32690)	
研究分担者	植山 俊宏 (UEYAMA Toshihiro) (50193850)	京都教育大学・教育学部・教授  (14302)	
研究分担者	上田 祐二 (UEDA Yuji) (50213369)	北海道教育大学・教育学部・教授  (10102)	
研究分担者	原田 大樹 (HARADA Hiroki) (50756492)	福岡女学院大学・人間関係学部・准教授  (37118)	
研究分担者	坂東 智子 (BANDO Tomoko) (60634764)	山口大学・教育学部・准教授  (15501)	
研究分担者	河野 智文 (KAWANO Tomofumi) (70304144)	福岡教育大学・教育学部・教授  (17101)	
研究分担者	山元 隆春 (YAMAMOTO Takaharu) (90210533)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授  (15401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	若木 常住 (WAKAKI Tsuneka) (90454579)	福岡教育大学・大学院教育学研究科・教授  (17101)	
研究分担者	長岡 由記 (NAGAOKA Yuki) (90615915)	滋賀大学・教育学系・准教授  (14201)	
研究分担者	辻村 敬三 (TUJIMURA Keizo) (90712505)	大阪成蹊大学・教育学部・教授  (34437)	
研究分担者	田中 智生 (TANAKA Norio) (00171786)	岡山大学・教育学域・教授  (15301)	
研究分担者	村井 万里子 (MURAI Mariko) (30174262)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授  (16102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金子 萌 (KANEKO Moe)	岐阜県立・・高等学校・教諭	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------